

一般社団法人
兵庫県病院協会

会報

● 発行 ●
一般社団法人兵庫県病院協会
〒651-0086
神戸市中央区磯上通
6丁目1番11号
兵庫県医師会館7F
TEL (078) 251-3030
FAX (078) 251-3011
会報編集委員会
印刷 株式会社 七旺社



目次

一 巻頭言 一

持続可能な医療と福祉

(一社) 兵庫県病院協会副会長 社会医療法人甲友会 西宮協立脳神経外科病院
理事長 大村 武久 3

一 随筆 一

歴史の転換点？

(一社) 兵庫県病院協会理事 兵庫県立尼崎総合医療センター
病院長 平家 俊男 4

令和2年の冬の失敗談

(一社) 兵庫県病院協会理事 赤穂市民病院 病院長 藤井 隆 6

＝ 役員就任のご挨拶 ＝

・(一社) 兵庫県病院協会理事 独立行政法人地域医療機能推進機構 神戸中央病院
病院長 松本 圭吾 8

・(一社) 兵庫県病院協会理事 公益社団法人日本海員救済会 神戸救済会病院
病院長 藤 久和 8

・(一社) 兵庫県病院協会理事 地方独立行政法人神戸市民病院機構 神戸市立医療センター中央市民病院
病院長 木原 康樹 9

・(一社) 兵庫県病院協会理事 医療法人尚生会 湊川病院
理事長 細見 和代 9

・(一社) 兵庫県病院協会理事 公立豊岡病院組合立 豊岡病院
病院長 三輪 聡一 10

＝ 会員病院紹介 ＝

地方独立行政法人たつの市民病院機構 たつの市民病院 理事長 嶋田 康之 11
病院長 三村 令児

医療法人社団いなみ会 私立稲美中央病院 病院長 竹長 真紀 14

＝ 編集後記 ＝

(一社) 兵庫県病院協会副会長・会報編集委員長
国立大学法人神戸大学理事 (病院担当) 副学長 杉村 和朗 16



〈表紙の写真〉

有馬富士公園のかやぶき民家

(三田市)

有馬富士公園は県立の公園で県内最大級の公園です。阪神間において多様化するレクリエーション需要に応えるため、平成十三年に開園しました。園内には、自然体験や生き物の観察に最適な施設や、日本の伝統的な住まいや暮らしを伝承するかやぶき民家があります。表紙の写真はそのかやぶき民家を撮影したものです。かまどのある土間やいろりなど、今では見ることが少なくなった昔の住まいの様子を再現しています。

かやぶき屋根とは、草でふかれた屋根の総称です。実は「かや」という植物は存在せず、屋根をふく草の総称のことを指します。かやの材料には、スキの他にヨシ等のイネ科の多年草が使われます。日本では古くから住宅に限らず社寺等のあらゆる建物に用いられてきました。伊勢神宮の屋根もかやでふかれています。吸音性や断熱性に優れ、夏は涼しく冬は暖かという特徴があります。

巻頭言

持続可能な医療と福祉



(一社)
兵庫県病院協会 副会長
社会医療法人甲友会
西宮協立脳神経外科病院
理事長 大村 武久

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は兵庫県では3月1日に西宮市で報告された1例目から9月5日現在、2346例目の報告となり、7か月目に入っても終息の見通しがつかない状況です。この間、兵庫県病院協会の皆さまは受け入れ病院やその他病院・施設に限らず、毎日緊張と不安の日々を送られていることと思います。

With CORONAは嫌な響きですが、受け入れざるを得ないのが現状です。できるだけ早く克服し、平穏なコロナ後の世界が戻ってくるまで忍耐強く日々を送るしかないのでしょうか。

さて、コロナ後の世界になったとして、今後の社会のことを考えたいと思います。最近メディアなどでSDGs（エス・ディー・ジーズ）という言葉が多数取り上げられています。日本語で言うと「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals）となっています。目新しいものではなく、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のためのアジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でより良い世界を目指す国際目標です。この「持続可能な」という意味は地球上で人類が生存し続けるということです。今回のCOVID-19に関して言えば、たとえ全世界の人が感染したとしても死亡率は数%でほかの人類は生き残れるわけですが、今の地球環境を放置したままでは地球の資源の枯渇化や、温暖化が進み、風水害などの巨大化や食糧不足に陥れば人類の滅亡につながっていくことになりかねないと思いま

す。その危機を回避するために2015年9月、国連本部で開催された「国連持続可能開発サミット」でSDGsが採択されました。

SDGsの目標は17あり、社会・経済・環境の3分野と、各分野と横断的にかかわる枠組みに分けられます。具体的には「社会」は貧困・飢餓・健康福祉・教育・ジェンダー・水・エネルギーなど、「経済」は雇用・格差・経済成長・生活インフラなど、「環境」は気候変動問題・海と陸の資源などです。2015年から各国が取り組んでいるのですが、すでに5年経過し、2030年までは10年しかありません。この5年間に環境意識は少し向上しましたが、格差・貧困・経済・資源などに関してはどうでしょうか。自国中心主義、強権国家、国家間の派遣争い、資源をめぐる紛争など、世界の分断が進み、国同士が協調してSDGsを達成しようとする姿勢がなく、むしろ後退しているように見えます。次世代、次々世代以降、人類の生存は持続可能なのでしょうか。不安感が大きくなります。

我々の地域に話を戻しますが、2015年以降の地域医療構想や地域包括ケアシステムの構築の政策のもと、「持続可能な医療と福祉」に対しての医療・福祉の関係者の意識と理解は高まってきたと思います。ただし、現実の事業運営に関しては医療費改定ごとの厳しい状況や、医療費・介護料の削減によるギリギリの経営を迫られており、現場のストレスは過大になっています。また、医療福祉分野は非常に生産性が低いといわれています。しかし、生産性が低いままでは高齢化で働き手の減少する社会では、維持することはできません。常に厳しい経営を迫られている民間病院では病床転換や質を上げながらの運営の効率化を模索しないと存続にかかわります。それには自院の地域での立ち位置の確認や存在感を高めることが基盤になります。さらに、公立病院との連携が重要となります。介護施設や在宅事業はほとんど民間ですが、これからの超高齢化社会にとってなくてはならないものです。しかしながら、やはり運営は厳しく、今回のようなコロナ禍の下では存続が危ぶまれます。病院も施設も事業所も今後の社会に

とっては社会インフラですから、国のみならず、自治体も、はるか過去のようなハード面の投資ではなく、県民や市民一人ひとりを見つめた投資を考えないと未来はありません。この点をもっと柔軟に新しい発想で議論の上、素早く実行していく必要があると考えます。10年、20年後を考えると、世界も日本も地域も待たなしの時に来ていると思います。子や孫の世代に過大な負債や負の遺産を持ち越すことなく、また、禍根を残すことのないよう、我々の世代は真摯に前向きに取り組んでいくことが重要と考えます。それには現在の世界のような分断化とは正反対に、公民が一体となり、地域住民に安心・安全を提供していかなければなりません。そして、地域の医療と福祉を持続可能にするため、行政の柔軟な対応を期待します。

病院運営に大変な毎日ですが、これからもご協力の程、宜しくお願い致します。

随筆

歴史の転換点？



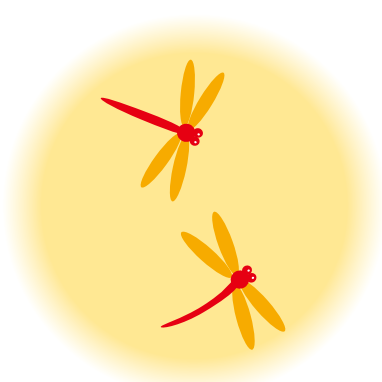
(一社) 兵庫県病院協会 理事
兵庫県立
尼崎総合医療センター
病院長 平家 俊男

中国の武漢市政府が新型コロナウイルス感染症（当初は正体不明の肺炎として）の存在を発表したのが昨年12月31日のこと。それから、瞬く間に、世界で1460万人が感染し、死亡者は60万人に上った（7月21日The New York Times, Coronavirus: Tracking the Global Outbreakより）。

2020年も気がつけばもう折り返し点を過ぎた。今年の10大ニュースを暫定版で選んでみると、どうなるだろうか。第1位は、何といても新型コロナウイルス感染症だ。以下、大恐慌以来の世界同時不況、英国の欧州連合（EU）離脱、世界の分断化、分極化、などいずれも大ニュースばかりだ。思い起こせば、この原稿を書いている7月第4週金曜日（7月24日）は東京五輪の開会式のはずだったが、新型コロナウイルス感染症第2波の到来を受け記憶のあなたに押しやられている。半年でこれだけの出来事を量産した今年、長く歴史に刻み込まれるであろう。

コロナ禍を契機に、私たちの社会生活をはじめ、政治・経済は大きく変わりつつある。しかし、それは過去との断絶ではなく、以前からのトレンドの早送りの感が強い。相次ぐ大ニュースに接して感じることは、コロナ禍は歴史を変えているのではなく、加速しているのではないかと感じる。

このような中、あらためて人類の歴史について思いを馳せることが多い。昨今の新刊本を含めて、あらためて目を通したいいくつかを紹介したい。



「暴力と不平等の人類史 戦争・革命・崩壊・疫病；ウォルター・シャイデル」著者のウォルター・シャイデルは、古代の社会および経済史、前近代の歴史人口統計学、世界史に対する比較のおよび学際的アプローチを専門としている。本書は昨年6月に発行されたが同年9月に第2版。本文582ページあるが、その内、索引と原注だけで141ページを占める。帯には「核戦争なき平等化はありえるか？」という刺激的な文章が縦書きで書かれている。横書きには第二次世界大戦、毛沢東の「大躍進」、欧州のペストという千万人単位が死亡した事件の結果として起こった平等化、生活向上、賃金上昇などの例を上げている。

これと対比される本が、「21世紀の啓蒙 理性、科学、ヒューマニズム、進歩；スティーブ・ピンカー」だ。言語学者で認知科学者。2011年の著作、「暴力の人類史」あたりから現代社会を論じるようになった。人間が幸せに生きるのに必要な三本柱として、理性、科学、ヒューマニズムを挙げる。ここ数十～百年のトレンドを示す様々なデータを示しながら、ざっくりと言えば「平均的に見れば、現代が一番生きやすい時代だ」というメッセージだ。ヒューマニズム、進歩を願う強い心情が根底にあり、そのケミストリーが随所にうかがえる。わからないではないが、歴史認識にはバイアスを取りのぞいた冷酷な評価が必要と思うのだが。次に紹介するユヴァル・ハラリは、「ヒューマニズムはDataism（＝データ）により切り崩される」とも述べている。

「21 Lessons 21世紀の人類のための21の思考；ユヴァル・ハラリ」は、今はやりのユヴァル・ハラリの書だ。科学、テクノロジー、哲学などの最新研究を取り入れながら現代の問題を21個に絞り考察していく。人類は、18～20世紀の間、勃発した産業革命の影響を、それまでの封建制や君主制、既存の宗教といった思想や社会モデルでは対応しきれなかった。この変化に対処するために自由民主主義国家や共産主義独裁制、ファシスト体制を生み出した。そしてその社会モデルの有効

性を実験するために、1世紀以上に及んで戦争と革命を必要とした。その結果勝ち取ったものが自由主義である。しかし、21世紀には、「ITとバイオテクノロジーの双子の革命」に代表される途方もなく大きな力と複雑に絡み合ったグローバルな社会の中で、その根底が覆されつつある。単純作業がAIや機械に取って代われ、高度な知能を要求される仕事が増える中、適応できた人とそうでない人の間に大きな格差が生まれている。この格差が、自由主義に亀裂を生じさせている。

「歴史の大局を見渡す 人類の遺産の創造とその記録；ウィル・デュラント／アリエル・デュラント」新刊ではない。これまでの人類の体験をまとめたもの。二人の著書の『文明の物語』より、人間の本質や将来への教訓を十三のエッセイに集約した、歴史の教訓を示す短い語りがつづられている本である。薄い。しかし内容は濃い。天文学、地質学、地理学、生物学、人種、心理学、道徳、宗教、経済学、政治学、戦争の視点から、人類の歴史を概観するかたちをとっている。

「そもそも歴史を学ぶことの意味とは何なのか」という本質的な点に始まり、歴史における宗教や政治・経済、そして文明の意義にまで言及する盛りだくさんである。【歴史は繰り返す。だが、それは概略においてのみである】【自由と平等が手を取り合うのを自然が笑見ながら見ているというのはユートピアの話である。自由と平等は深い恨みをいなく永遠の敵同士で、一方が栄えると一方が減びる】などリアリズムに富んでいる。【飢饉と疫病と戦争。どれも悲惨ものだけど、もしかしたら人類の自浄作用なのかも】と聞いたときは、怖さも感じる。前述ユヴァル・ハラリの「サピエンス全史」にも通じるものがある。

「僕らは星のかけら 原子をつくった魔法の炉を探して；マーカス・チャウン」「僕らは星のかけら」という表現は、単なる詩的なレトリックではなく、私たち、私たちを取り巻く自然には、太古の宇宙からやってきた原子により成り立っていることに由来する。我々も惑星も、もともとは一

つの同じかけらなのだ。原子は最小単位ではない。ではこれらの世界を構成している原子はいったいどこでどのように作られたのか？その炉を求めて、古代ギリシアの世界観から最新の宇宙物理学・天文学までの長い話した。スケールの大きな地球、宇宙の歴史の話した。

後世の人たちは、2020年を、どのように歴史に織り込んでいくのであろうか。

令和2年の冬の失敗談



(一社) 兵庫県病院協会 理事
赤穂市民病院

病院長 藤井 隆

令和2年は新型コロナウイルス感染症で始まりました。特に医療機関では明けても暮れてもこの話題が尽きません。皆さんの気休めにこの小欄では私が経験した失敗談を披露します。

私の財布はチェーンが付いていてズボンのベルト通しと繋がっています。それはある出来事に由来しています。今年の1月のある日に大阪で用事を済ませて、東京の研修会に新幹線で行く予定がありました。大阪の用事に手間取り新幹線の出発時間が迫っており、新大阪駅でタクシーを駆け降り改札口に走って行きました。ところが改札を通過する時にチケットを入れた財布がない!! 頭の中は真っ白になりました。「どこかで落としたのか、スリに遭ったのか？」急いでタクシーを降りた場所まで引き返し、あたりを見回すも財布はありません。「きっと財布はタクシーの中だろう。」今日に限って領収書ももらってないのでどこのタクシー会社なのかわかりません。大阪市タクシー協会に電話をし、事情を話し連絡先を伝えました。「今のところ財布の拾得の連絡はありません。」との返事でした。

財布の中身は新幹線の往復チケット、ホテル代など現金数万円、自動車運転免許証、クレジットカード数枚などです。財布は無くなるし、東京にも行けなくなるし、虚脱感とともに駅のベンチに座りこみました。運良くいつも持ち歩いているシステム手帳にたまたまお札をはさんでいたので、家までは帰ることはできます。東京の研修会はあきらめ、宿泊予定ホテルにキャンセルの電話を入れました。新大阪駅で次にすべき行動を考え、交



番に行きました。キャリーバッグを引きながら歩くこと約10分、中年の警察官は「日本では5割くらい落とした財布はかえって来ますよ。」と笑顔で遺失届けを受け取ってくれました。この交番では財布紛失は1日に約20件もあるそうです。隣にもやはり財布を落として困った様子の旅行中の外国人がいました。その後カード会社に電話し、使用停止措置をとってもらいました。

妻にTELし、事情を話すと「命を落とさなくてよかったじゃない。」と慰めの言葉。JRに乗って、赤穂の自宅に着くと、すでに新しい財布をイオンで買ってくれていました。

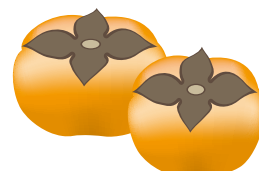
そして2日後の月曜日の朝、警察署から「親切な方が拾って届けてくださった。」と電話連絡がありました。財布の中身もそのままだったとのこと。拾い主は名前も言わずに立ち去ったとのこと。タクシーの中ではなく、道に落ちていました。思わず大声で誰ともわからない方に「ありがとう。」と言いました。

次の休日、ホームセンターで財布に穴をあける道具と金具を買い、落とした財布にチェーンを取り付けました。接続部は市販の物と変わらないくらいきれいにできあがりました。

今から30年ほど前の話ですが、大阪の書店でお腹が痛くなり、トイレに駆け込みました。目の前の棚に財布が置いてありました。書店のレジの店員に渡しました。店員が「住所、氏名を書いてください。」と言いましたので「めんどくさいな。」と思いながら書いたことがあります。それから1週間ほど過ぎた日に、自宅に奈良の住所の知らない男性から手紙が来ました。手紙には図書券が添えられ、財布を拾ってくれたお礼が書いてありました。「もし、拾って届けてもらわなければ帰りの電車賃もなかった…。」と書いてありました。生まれてから財布を拾ったことも落としたことも今のところ一度ずつで、今後はチェーンのお陰で財布を落とす可能性は減ります。私は病院経営、運営において失敗は許されないと思いながら行動していますが、それは実はおごりで、実は私が自覚していない失敗をこのチェーンのようにカバーしてくれる多くの病院職員が院内にいます。

話は新型コロナ感染症に戻ります。新型コロナ感染症第一波初期の時は、当院は西播磨唯一の感染症指定病院として孤軍奮闘、院内でもごく一部の職員がその対応に当たっていました。そのうち多くの院内職員が協力して対応するようになり、次には西播磨のいくつかの病院が、PCR検査等実施で協力してくれる様になりました。第一波が収束し、冬まで大丈夫かなと油断していたらすぐ第二波。その時は当院以外に西播磨の数病院が新型コロナ患者入院を受け入れる方針を出してくれました。現在は第三波に向けては医師会を中心に地域の診療所の先生方が、地域の検査センター開設に動いていただいています。このように地域の医療従事者で協力の輪が広がっています。

100年に一度の感染症禍の最中、医療機関では職員が疲れ、入院、外来患者さんも減り、経営的にも大きな打撃がありますが、この危機は逆に、地域の医療機関同士が助け合い、一丸となるチャンス、そして医療従事者の社会貢献を地域住民にアピールするチャンスでもあると思います。



役員就任のご挨拶



理事

独立行政法人
地域医療機能推進機構
神戸中央病院
病院長 松本 圭吾



理事

公益社団法人
日本海員済済会
神戸済済会病院
病院長 藤 久和

この度、大友理事の後任として兵庫県病院協会の理事に就任させていただきました松本です。平成13年にJCHO神戸中央病院（当時は社会保険病院）に赴任し、脳神経外科部長、副院長を経て、本年4月に院長を拝命しました。

当院は昭和61年に中央区（当時は生田区）中山手から北区惣山町に移転し、急性期医療全般に加えて健康管理センター、介護老人保健施設などを備えた地域の総合的な医療施設として機能しております。急速な高齢化に伴う医療体制の変革が求められている現在、6年前に移管された地域医療機能推進機構（JCHO）の理念である「地域包括ケアの推進」とともに「地域医療支援病院」としての役割を果たすことが肝要かと考えています。

いまだ新型コロナウイルス感染の終息が見えないなかではありますが、ポストコロナ、ウィズコロナの時代において果たすべき兵庫県の病院医療・地域医療に対して、当協会の皆様と意見交換しつつ貢献できればと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

この度、兵庫県病院協会理事を拝命致しました藤でございます。神戸済済会病院に約20年勤務し、令和2年4月より院長に就任しました。就任時に当院の重点項目として『地域から求められる医療の推進』を掲げ、地域ニーズにあった病院体制構築の推進を決定しました。

しかし、今回のCOVID-19の猛威によりその構想はいとも簡単に見直しを余儀なくされました。そればかりでなく、医療も含めた社会や経済が崩壊への危機感で埋めつくされています。医療備品や電子製品、薬の調達も困難になっている現状に加え、兵庫をはじめ東京、大阪などの大都市圏を中心に病床の確保や医療従事者の過度の負担も問題になっています。またこれまで進めてきた地域医療構想や医師の働き方改革、専門医制度等に対する当病院などでのシステム化や効率化も再考する必要に迫られております。今後この難局を乗り越えるには、当院が単独で諸問題に対応するのではなく、地域の公的病院や民間病院の各々の役割や分担を考え、さらに行政や住民も含めた将来の地域の診療機能の在り方を丁寧に議論しあうことが最良の方策だと思考しております。

微力ではございますが兵庫県病院協会の皆様とも連携をとり、地域の医療に貢献できればと考えております。ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

**理事**

地方独立行政法人
神戸市民病院機構
神戸市立医療センター
中央市民病院
病院長 木原 康樹

**理事**

医療法人尚生会
湊川病院
理事長 細見 和代

この度、細谷理事の後任として兵庫県病院協会の理事に就任させていただきました神戸市立医療センター中央市民病院の木原康樹と申します。もとより微力ではありますが、協会の発展のために少しでもお役に立てますよう努めて参る所存でございます。

私は平成17年から当時の神戸市立中央市民病院に循環器内科医として勤めさせていただきました。平成20年に神戸を離れ、その後12年間、国立大学法人広島大学にて臨床教室の創設、医学部学生の教育、そして大学法人医学・医療と企業との連携推進等の仕事に携わって参りました。本年4月に中央市民病院に復帰いたしましたが、直後より新型コロナウイルス感染症重症患者の受入れや、付随した院内感染への対策などに暫く追われておりました。会員の皆さまには多大なるご心配、ご迷惑をお掛けいたしましたこと、深くお詫び申し上げます。感染症パンデミックは確かに禍がありますが、その渦中であって学んだことを血肉に転換することができれば、力となるやしません。そのため私ども体験の整理、判断の検証、過程の刻字を行い、それを礎に今迄以上の診療体制を提供することができれば、またそれを広く共有することができれば、と念じておる次第です。

皆さまのご指導とご鞭撻のほど、何分よろしくお願ひ申し上げます。

この度、長尾理事の後任として兵庫県病院協会の理事を拝命いたしました細見です。

平成26年より兵庫県精神科病院協会の理事を務めております関係でお声掛け頂いたのですが、白状しますとそれまで兵庫県病院協会の会報もほとんど読んだことがありませんでした。そんな私が森村先生、長尾先生と大先輩の後を引き継ぐことになり戸惑っております。

私は平成4年に大阪医科大学を卒業後、母校神経精神医学教室に入局、その後は、大阪府下の単科精神科病院や総合病院、老人専門病院で精神科臨床に携わってきました。平成29年より父の後を引き継ぎ湊川病院の理事長を務めております。湊川病院は私の曾祖父が大正4年に神戸で開院し、創立100余年になる県内で一番古い精神科病院です。

さて、我が国における精神保健医療福祉施策は、「入院医療中心から地域生活中心へ」と改革が進められています。湊川病院では24時間365日いつでも対応可能な精神科救急の認可を受け、多職種によるチーム医療を行い短期間での退院を目指しております。退院後はそれぞれの患者様の状態や生活目標に合わせた支援を行うために、外来・デイケア、在宅支援・就労支援の各部門が連携をとり合い、常にチームを組んで治療や支援に取り組んでおります。

現在のコロナ渦もふくめ昨今の医療を取り巻く環境は厳しさを増すばかりですが、兵庫県病院協会の皆様と情報交換を行いながら、微力ではありますが地域医療に貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

**理事**公立豊岡病院組合立
豊岡病院

病院長 三輪 聡一

この度、兵庫県病院協会の理事に就任させていただきました公立豊岡病院の三輪でございます。

公立豊岡病院は、兵庫県北部の但馬地方の中心都市— 豊岡市 —にあり、但馬地方で唯一の急性期総合病院です。当院の使命は、理念に謳っているように、「但馬地域の基幹病院として、高度かつ最適な医療を安定的に提供し、地域住民の健康と生命を守り続けます」です。すなわち、当院の主な機能としては、「救急医療と高度医療の提供」ということに加え、「基幹病院としての存続」が重要と考えています。但馬地方の面積は東京都に匹敵しますが、人口は約16万人で東京都の100分の1です。当地域には8つの病院があり、すべて公立病院です。他病院はいずれも小規模であり、慢性期および回復期に対応しています。当院は24時間体制で救急患者を全例受け入れており、救急外来の年間受診者数は15,270人（令和元年度）で、その内救急車によるもの4,489人、ドクターヘリの出動回数は年間1,858回（日本一）でした。他方、高度医療推進のため、手術支援ロボットなどの高度医療機器の積極的な整備を行っています。このようなことが可能なのは、公立豊岡病院組合を構成している豊岡市と朝来市の財政支援と市民の皆様のご理解・ご支援のおかげと大変感謝しております。

当院は、医師不足および財政赤字という2つのへき地病院固有の問題と、人口の高齢化・減少という地域固有の問題に慢性的に悩まされていますが、兵庫県病院協会の皆様と連携しつつ、微力ではありますが地域医療に貢献してまいりたいと考えております。よろしくお願ひ申し上げます。



会員病院紹介

地方独立行政法人たつの市民病院機構

たつの市民病院



理事長
嶋田 康之



病院長
三村 令児



理念

たつの市民病院は、“こころある医療”を通して地域に貢献する

病院概要

施設名：地方独立行政法人たつの市民病院機構
たつの市民病院

所在地：〒671-1311
兵庫県たつの市御津町中島1666番地1

TEL：079-322-1121

FAX：079-322-3177

病床数：120床（急性期一般病棟40床、地域包括ケア病棟40床、回復期リハ病棟40床）

診療科目：内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、糖尿病内科、外科、脳神経外科、整形外科、麻酔科、リハビリテーション科、眼科、精神科、老年精神科、歯科、皮膚科、形成外科、泌尿器科

医療機器設備：CT（HITACHI、SCENARIO、64スライス）、MRI（HITACHI、APERTO、0.4T）、手術室3室

沿革

- 昭和27年4月 東芝病院を御津町が買収し公立御津病院を開設（病床数：一般48床）
- 昭和30年5月 病床数：一般60床、結核101床、計161床に変更
- 昭和48年8月 病床数：一般150床、結核71床、計221床
- 昭和57年10月 病床数：一般160床 結核病棟廃止
- 昭和59年3月 救急病院告示
- 平成元年4月 診療科目：内科、外科、小児科、眼科、呼吸器科、整形外科、麻酔科、消化器科、循環器科、理学療法科
- 平成12年4月 御津町介護老人保健施設「ケアホームみつ」、居宅介護支援事務所開設
- 平成17年10月 市町合併により「たつの市立御津病院」に名称変更
- 平成24年8月 たつの市民病院名称変更
病床数 一般120床
- 平成24年11月 新病院建設工事竣工
- 平成28年3月 訪問看護ステーション「れんげ」開設
- 平成30年10月 地方独立行政法人化を進める方針を市長が市議会にて表明
- 令和2年3月 兵庫県知事が地方独立行政法人化を認可
- 令和2年4月 地方独立行政法人たつの市民病院機構に運営形態を変更

はじめに

たつの市は、平成17年（2005年）10月1日に龍野市、揖保郡新宮町・揖保川町・御津町が合併して誕生しました。兵庫県南西部に位置し、南北に長い地形となっていて、北側は山地が広がり、南側は瀬戸内海に面し、南北を揖保川が流れています。面積約210km²、人口約7万4千人、少子高齢化人口減の圏域でもあります。

当院は、沿革にもあるように、昭和27年（1952年）4月に東芝病院を御津町が買収し公立御津病院48床で開設された病院です。幾度か、病床機能や診療体制の見直しがあり、昭和48年（1973年）8月には、病床数は、一般150床、結核71床、計221床にまで拡大されたことがあります。そして現在は、たつの市民病院120床、介護老人保健施設ケアホームみつ29床、訪問看護ステーションれんげ、居宅介護支援事業所、室津診療所を運営しています。

地方独立行政法人への移行

先人たちの努力により、地域に根差した病院として、患者様とご家族、そして地域のすべての方々との心のふれあいを大切に、医療を提供してまいりました歴史ある病院ですが、今後も地域の方々が、安心して医療・介護サービスを受け、住み慣れた地域で療養や生活を継続できるようにするためには、経営の健全化が急務の課題となっていました。

このような状況から、今後の安定的かつ持続可能な病院形成を検討するため、市は外部有識者を含めた「たつの市民病院経営検討委員会」を立ち上げました。経営検討委員会では約4か月間にわたり議論が行われ、市は急速な高齢化の影響等から今後予想される医療環境の変化に対応するために、職員の雇用を継続でき、病院運営の自由度が増すことができる「地方独立行政法人」への経営形態の変更が適切との経営検討委員会からの答申を受けて、市民病院の地方独立行政法人化を進める方針を決定し、令和2年（2020年）4月1日から「地方独立行政法人たつの市民病院機構」として運営をしていくこととなりました。

当院の目標と役割

1. 地域医療構想を踏まえた医療の提供

地域医療構想については、地域医療構想調整会議へ参画し、兵庫県及び龍野健康福祉事務所と連携をとります。病床機能については、地域の医療ニーズを踏まえ、将来不足が見込まれている高度急性期病床及び回復期病床の整備を行い、地域医療構想との整合を図ります。

2. 救急医療の安定化

救急医療については、休日・夜間においても院内の各部署や救急隊との連携を強化し、内科の救急患者受入体制を確保するとともに、他の医療機関からの重急性期以降の二次救急医療による入院に対して、受入体制の強化を図ります。

3. 地域包括ケアシステムへの貢献

地域包括ケアシステムの中心的役割を担うため、病院と在宅連携や地域の医療機関の後方連携等、診療圏における地域の医療機関、介護支援専門員、介護事業所、市等との連携を強化することで、入院から在宅療養まで、患者やその家族を取り巻く環境に応じた適切な支援を行えるよう取り組みます。

4. 在宅医療の充実

在宅医療については、在宅療養支援病院として、訪問診療、訪問リハビリ及び看取りの実施体制の更なる強化を図り、退院後の在宅生活を支援します。

5. 外来診療

外来診療科については、多角的に診療を行う総合診療体制を維持するとともに、嚙下外来の整備等安全安心な在宅生活を支える視点に立った外来機能の充実を図ります。

6. 訪問看護

訪問看護ステーションについては、24時間対応の実施や、たつの市・揖保郡医師会在宅サポート医制におけるコールセンター機能等のサービスを充実させるとともに、病院本体との連携による看

取りも含めた切れ目のない医療サービスの提供の一翼を担えるよう努めます。

7. へき地医療の提供

室津地区を取り巻く環境や医療ニーズを考慮しながら、室津診療所における外来診療の維持に努め安定的な医療を提供していきます。

——— 最後 に ———

高齢化の進展に併せて、医療技術の進歩や高額な医薬品開発等による医療費増大や、医療・介護サービスの担い手が減少など、医療や介護を取り巻く環境は益々厳しくなっています。病院の安定的持続性を確保しつつ、財政面との調和を図りながら、経営の効率化や健全化に真正面に向き合っ取り組まなければなりません。当院の理念である「こころある医療を通して地域に貢献する」を全うするために、今後も飽くなき努力を続けていく所存です。会員施設の皆様と更なる連携の強化など、ご協力をお願い致します。



手術室



CT



MRI

医療法人社団いなみ会

私立稲美中央病院



病院長 竹長 真紀



私立稲美中央病院は加古川市、明石市、神戸市に隣接する加古郡稲美町の自然豊かな環境の中にあります。昭和30年代、稲美町の人口は約1万8千人でしたが、東播磨の臨海地域や阪神地域のベッドタウンとして住宅開発が行われるようになって以来右肩上がりに人口が増加して行き、平成20年代のピーク時には人口約3万2千人となりました。その後若干の減少傾向はみられるものの令和2年に入ってから人口は3万1千人台で推移しています。また、世帯数については、昭和40年の約4千世帯から右肩上がり続け、平成22年には1万世帯を超えていますが、1世帯あたりの規模は、昭和40年には4.73人だったものが、核家族化や少子高齢化の進展により平成22年には3.03人と減少傾向を示しています。

こうした中、地域住民の皆様の求める医療サービスも時代と共に様々な形に変化していき、この稲美町において唯一の急性期病院として昭和52年に開院した私立稲美中央病院は、時代の変化に合わせ常に地域に必要とされる病院として成長すべく努力を重ねて参りました。開院当初一般病棟50床からスタートした当院は、平成12年には地域の皆様のニーズに応えるべく医療療養病棟を開設、更に令和2年には新たに回復期リハビリテーション病棟を開設し、急性期医療から慢性期医療まで一貫した医療の提供と、より良い形での

在宅復帰を望む患者様に寄り添い質の高いリハビリテーションを提供することの出来る病院として、常に地域の皆様の健康を支えて参りました。現在、一般病棟50床、回復期リハビリテーション病棟22床、医療療養病棟54床、合計126床の病棟を持ち、消化器外科・肛門外科・外科・内科・整形外科・胃腸内科・放射線科・循環器内科・眼科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション科といった診療科を設け、地域医療の担い手として日々患者様の求める医療サービスの提供に力を尽くしております。また、自宅で医療サービスを受けたいと希望される方々の思いにこたえる為、令和元年より訪問診療を開始しており、御自宅や近隣の入所施設で生活されている高齢者の皆様の健康管理にも力を注いでおります。今回新たに建設した新病棟では建物全体に日の光を多く取り込む構造を採用することで病棟全体が明るくゆったりとした雰囲気となっており、患者様が病院で過ごされる時間をできるだけ穏やかなものとするようにいたしております。新病棟1階部分には外来診察室、検査室、そして最新の設備を導入したリハビリルーム、広々とした待合室を設けました。2階には急性期病棟、3階には回復期リハビリテーション病棟を設け、それぞれの病棟には中心部にナースステーションを配置し、病室や廊下には十分な面積を確保し患者様、スタッフの動線にゆとりを持たせることで安全な入院生活を送っていただく事が出来るようにしております。また、1階のリハビリルームの他に、3階にもリハビリルームを設けており、充実したリハビリテーションを行う事のできる環境を整えました。新病棟開設後は、回復期リハビリテーション病棟にご入院中の患者様だけではなく、一般病棟にご入院の患者様にも、以前にも増してできるだけ早いタイミングでリハビリテーションに取り組んでいただくよう努めております。そのため、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を増員、各スタッフが日々自己研鑽に励むことにより、病院全体のリハビリテーションのスキルアップを図りサービスの向上に努めております。

平成27年、私立稲美中央病院の位置する稲美町では「稲美町人口ビジョン」及び「まち・ひと・

しごと創生総合戦略」が策定されました。これは近年我が国が直面している、少子高齢・人口減少社会という問題に長期的に取り組むため、稲美町が独自に活気ある町の創生を図ることを目的として策定されたものです。町が掲げる「安定した雇用の創出」「新しい人の流れをつくる」「若い世代の結婚・出産・子育ての希望を叶える」「時代に合った地域を作り、安心な暮らしを守ると共に地域と地域を連携する」という4つの基本目標に対し、当院も魅力あるまちづくりに貢献するべく、通常の診療活動のほか、予防医療としての人間ドックや地域の企業にお勤めの皆様の健康診断などにも積極的に取り組んでおり、稲美町と周辺地域の幅広い年齢層の皆様に安心した生活を送っていただく為の一助となればと願っております。

新病棟開設から約半年が経ち、ようやく急性期病棟、療養病棟、回復期リハビリテーション病棟、それぞれの病棟が役目及び目標をしっかりと果たせるようになってきており、様々な患者様の受入れが可能となっております。これからも地域住民

の皆様のため、地域活性化の一環として、近隣の医療機関、関連各機関の皆様方のご協力を賜り、地域内での連携を強化することにより、稲美町を中心とした地域住民の皆様がいつでも安定した医療を受ける事ができる環境を整えることに、微力ながらも貢献できるようスタッフ一丸となり努力して参りますのでどうぞよろしくお願いたします。

病 院 の 概 要

名 称：医療法人社団いなみ会

私立稲美中央病院

所 在 地：兵庫県加古郡稲美町国安1286-23

理 事 長：藤川 雄三

病 院 長：竹長 真紀

ホームページアドレス：<https://inamichuou-hospital.or.jp/>

診療科目：消化器外科・肛門外科・外科・内科・
整形外科・胃腸内科・放射線科・循環
器内科・眼科・耳鼻咽喉科・リハビリ
テーション科

病 床 数：126床



新病棟



CT



リハビリルーム

編集後記

本号では、新型コロナウイルス感染症について様々な視点からご意見をいただき、それぞれ大変興味を持って拝読しました。

この数カ月、個人的に感じるのは、今まで長期間出来なかったことの多くが、あっという間に実現したことです。例えばWEBの利用です。大学では様々な障害児が学習しており、多くの障害学生にWEBの有用性が知られていましたが、様々な理由、規制によって殆ど利用できませんでした。殆どの大学で、WEB講義が通常の形態になったため、障害学生たちは大きな恩恵を受けています。

オンライン会議の設備があるのに殆ど使われていませんでしたが、会議どころか学会も付け焼き刃のインフラで行えています。WEBは補助としては使えるが、講義、学会は対面で無ければ成り立たないという無意識のバイ

アスが障害になり、出来ない理由を見つけて拒否していた事がよく分かります。

世の中ではびこる無意識のバイアスが、実は大したハードルではなく、大きな力の前にはもろくも崩れてしまうという事を実感させてくれた新型コロナウイルス感染症です。

多くの感染者と重症者、死亡者、それに付随する経済の低迷といった犠牲の上に得られた意識改革の芽です。本号の中でも述べられているように、従来の枠にとらわれずに、様々な病院改革を行って、より良い医療の提供を行って行くのが我々医療人の役目であろうとの思いを強くしています。

(一社) 兵庫県病院協会副会長・会報編集委員長

杉村 和朗

国立大学法人神戸大学理事(病院担当) 副学長 記

